

読み聞かせにおける教師の自己修練

前田真証

I 本研究の目的と方法

読み聞かせに関する書物も数多く出されるようになった。しかし、読み聞かせをになう教師が、どのような力量をどのようにして身につければよいか、正面から記された文献は稀であろう。実際に読み聞かせに携わり、日々子どもを目の前にして努力されている方が会得されたものを学び取る必要がある。その得がたい手がかりになるのが、福岡県立図書館司書として三二年間勤められ、久留米市の自宅においても子ども図書館を開かれている川島久美子氏が、授業の際に学生諸君に提供された以下の二種の資料である。便宜上、通し番号をつけて内容の概略を示す。

- (1) 「絵本の読み聞かせ」…読み聞かせの総論にあたるもの。
 - ① 読み聞かせの意義(三点) / ② 読み聞かせの手順(原則と内容に応じた対応を要請) / ③ じょうずな読み方 / ④ グループの読み聞かせに向く本を選ぶポイント(五点) について言及されている。…一枚

- (2) 「絵本の読み聞かせのポイント」…どういう絵本をどんなことに留意してどのように読めばよいかという実践の指針を挙げられたもの。「読み聞かせに合った本」(五点)と「じょうずな読み方」(七点)について述べられる。…

二枚

わずか三枚の資料であるが、平成六年から福岡教育大学において幼稚園教諭に必要な「ことば」(後に「ことばの指導法」に科目名が変更される)の時間に必ず携行され、倦まず、たゆまずに語られるところを見ると、ここに読み聞かせの原理・根本方針が内包されていると推察される。しかも、上記(1)の「絵本の読み聞かせ」には、二カ所に松岡享子氏の『えほんのせかい こどものせかい』(東京子ども図書館、後に日本エディタースクール出版部、昭和四七(一九六二)年三月初版、新装版は昭和六二年(一九八七)年九月五日発行、全二一ページ)が取り上げられている。この書は、初版本が一四版を重ね、新装版も一八刷を数えるに至っている。言わば、読み聞かせの古典とも言

うべき名著を主要な手がかりとしているわけである。そして、三〇年以上、ここにあるものを原点として読み聞かせに打ち込んで間違いはなかったという実感が、上記(1)・(2)の資料にこめられていよう。

この二種の資料のうち、(1)の②「読み聞かせの手順」と③「じょうずな読み方」が、(2)の「じょうずな読み方」に照応し、(1)の④「グループの読み聞かせに向く本を選ぶポイント」が(2)の「読み聞かせに合った本」と対応する。したがって、上記の資料には、下記の三点が集約的に記されていることになろう。

○絵本の読み聞かせを通して、何を目指すかを見きわめ、どんな場面に直面しても揺るがない担い手になること

(読み聞かせの意義)

○読み聞かせにふさわしい絵本として何を選ぶかを決める際に指針としてはたらく観点を持ち、自らの絵本選択力を高めていくこと(読み聞かせに合った本の選択)

○子ども達を前にして読み聞かせをするために、事前にとどのような練習をし、実際にどのように読み聞かせをしていけば、絵本の世界にひたらせることができるかを会得すること(読み聞かせの手順、じょうずな読み方)

これら三点のうち、本稿においては、読み聞かせの意義と読み聞かせに合った本について川島久美子氏が配布された資料を示し、(ア)松岡享子氏の書物との異同を明らかにし

て、(イ)読み聞かせに適進された方の真意に迫り、(ウ)教師としてどのように自己修練すればよいかを明らかにしたい。

II 読み聞かせの意義・目標の見きわめ

川島久美子氏が配布された資料(1)の冒頭には、「読み聞かせの意義」が次のように記されている。

「①本の世界の楽しさを知らない子どもに、本の世界の楽しさを教え、本と子どもとを結びつける最も簡単でもっとも効果的な方法。

○文字を音声化することによって、字の読めない子に本の世界の楽しさを伝えることができる。

○文字を読める子どもでも、耳から聞いて理解する力と、自分の目で読んで理解する力とは、後者のほうがずつと遅れて発達するので、読み聞かせによって、そのギャップを埋め、本の楽しさを知らせる。

②大人に読んでもらうことによって、読んでいる大人の物語への解釈、味わい方、感動なども、声と一緒に子ども心に受け入れられるため、子ども自身が活字から引き出せる以上に、本の世界を楽しむことができる。

③読み手と子どもとが、同じお話の世界を共有することで、親近感や、愛情が生まれ、図書館や文庫では、子どもたちと親しくなるためにも有効である。」

以上の説述によれば、読み聞かせは、以下の三要素から

なる。

(ア) 誰が何によって…: 大人が自らの肉声によって

(イ) 誰に…: 本の世界の楽しさを知らない子どもに (文字の

読めない子どもが主だが、文字の読める子どもにも)

(ウ) 何を指す方法か…: ④本の世界の楽しさを教え、⑤本

と子ども達とを結び付ける最も簡単に効果的な方法

したがって、①読み聞かせの本質(役割)を見据えて、

発達段階に応じた目的の進展をはかり、②大人が自らの肉声を通して語ることの意味(教育性)を探り、③読み手と聞き手との間にかもし出される共有感(豊饒性)にも着目することになるのである。①は読み聞かせの意義として大人が意識すること、②は子どもが読み聞かせによって得られるもの、③は両者に副次的にもたらされるものとも言えよう。これらを念頭に置くと、下記のように整理できよう。

発達段階に応じた読み聞かせの役割

<p>文字の読めない(時期の)子どもに対して</p>	<p>文字を音声化することによって、本の世界の楽しさを伝えることができる(読み聞かせの基本的役割)。</p>	<p>目的(1) 主として本の世界の楽しさを教える(直接的目的)。</p>
<p>文字が読めるようになってきた時期の子どもに対して</p>	<p>(ア) 耳から聞いて理解する力と、自分の目で読んで理解する力とは、後者の方が、ずっと遅れて発達するため読み聞かせによってその落差を埋め、本の楽しさを知らせることができる。 (イ) 大人に読んでもらうことによって、読んでいる大人の物語の解釈、味わい方、感動なども声と一緒に受け入れられるため、子ども自身が活字から引き出せる以上に、本の世界を楽しむことができる。(読み聞かせの教育性)</p>	<p>目的(2) (大人が入らなくても自ら読んでいけるように)本と子ども達を結び付ける(究極の目的)。</p>
<p>文字が読め、自力で読んでいく手応えを感じてきた子どもに対して*</p>	<p>本の楽しさを知り、自ら読み終える達成感を知って、自ら読みたい(もしくは必要な)本を探し、読破していくようになるための手助けを得て、本から離れない人/読書生活に役立てていく人になる。*</p>	<p>目的(2) (大人が入らなくても自ら読んでいけるように)本と子ども達を結び付ける(究極の目的)。</p>

自力で読めるようになって子ども（本の楽しさを十分にわかっている子ども）に対して *

(ア) 音声化してもらうことが容易に本の世界に入れる方法であることには変わりがないため、いつになっても楽しい世界に浸れる方法にはなる。それが読むことの楽しさの原点を自覚することにつながるかもしれない。

(イ) 読み手の声を通して、その人の解釈・味わい方・感動を汲み取ることが楽しくなるという面もかなり出てこよう。（上記の②読み聞かせの教育性と関連）

(ウ) 大人がわざわざ時間をかけて、一つのお話の世界を共有しようと努めていることに対して、感謝の思いも湧いてこよう。（上記③読み聞かせの豊饒性と関連） *

目的(3) 読み手と聞き手の心を結びつける。
(副次的目的)

*は考察者の付け加え

この読み聞かせの意義については、松岡享子氏の『えほんのせかい こどものせかい』の第一章にあたる「子どもを本の世界へ招きいれるために」の冒頭の二節に、以下のように言及されている。

(ア) どうぞ中から門をあけてやってください。

「おはいり」と声をかけてやってください。

子ども達はすぐそこまで来ているんですから。

○読み聞かせは文字の読めない子ども達を本の世界に引き入れるために最も必要で、着実に効果の上がる方法

(六〜七ページ) ↓①読み聞かせの本質に

(イ) 子どもに本を読んでやる時、その声を通して物語と

いっしょに、さまざまなよいものが子ども心に流れこみます。

○私達大人が読み聞かせるのと、読み手の、物語の理解、解釈、味わい方、傾倒の度合、好みが表われる。子どもは物語といっしょに読み手のもつ、文学を味わい、楽しむ能力をも、あわせて吸収することになる。(一〇ページより)

○ページより) ↓②読み聞かせの教育性に

○読み聞かせという行為それ自体の中に、子どもは、おとなの自分に対する愛情を感じとっている。(一〇ページより) ↓③読み聞かせの豊饒性に

このように比べてみると、項目としては矢印のように、

ほぼ対応する。違うのは、松岡享子氏が、読み聞かせの基本的役割を「本の世界に引き入れる」とまとめられているところを、川島久美子氏は「本の楽しさを教え、本と子供を結びつける」と分節したところである。それに応じて、発達段階も考慮して「文字の読めない子どもたち」に対してだけでなく、「文字の読める子ども」ととつての役割にも言及されている。それだけ、読み聞かせの基本的役割が、直接の目的である(1)本の世界の楽しさを教えることと、究極の目的である(2)（大人が介在しなくても自ら本を読んでいるように）本と子ども達とを結びつけること というように、重層的に見極められたことになる。そして、聞き手の文字の読める能力の発達段階に応じた読み聞かせの意義づけの違いにも目配りがなされている。

このように、根本の見通しがつけられてくると、大人が自らの肉声を通して読み聞かせをすること自体に着目したことの意味づけ(②教育性)にも、川島久美子氏の工夫された点が浮かび上がってくる。松岡享子氏の説述「私たち大人が読むと、読み手の、物語の理解、解釈、味わい方、傾倒の度合い、好みが表示される」を、川島久美子氏は、「大人に読んでもらうことによって、読んでいる大人の物語への解釈、味わい方、感動なども、声と一緒に子どももの心に受け入れられるため、(一層)本の世界を楽しむことができる」と改められている。松岡享子氏が列挙されたもの

を、子どもの側から「解釈」(個々の物語をどうとらえているか)、「味わい方」(どのような方法で浸り、親しんでいるかという鑑賞方法)、「感動」(どのくらい心を動かしているか)などと、三点に集約されている。しかも、「子ども自身が活字から引き出される以上に」と、文字が読めるようになり、自力で本を読むのが楽しいと思えるようになった子どもにとつても、その楽しさを超えるものがあるとしているのである。したがって、②の項目(読み聞かせの教育性)は、むしろ、子どもが発達すればするほど一層しつかり汲みとれるものになる。

①(読み聞かせの基本的役割)、②(読み聞かせの教育性)の關係が闡明されてくると、③(読み聞かせによる物語世界の共有が読み手と子どもを結びつけること)は、それらが満たされることによって、自ずと生じてくるものと判明してくる。川島久美子氏がこの項目を三番目に挙げられたことは、そのことを自覚されたゆえといえよう。読み聞かせの直接の目的とは言えないが、間接的にはきわめて大切なことなのである。

これらの指摘から、教育者が自らの力量形成に生かすべきものは何であろうか。

(1)ここに記された読み聞かせの意義づけの構造的理解は、何よりも教師に読み聞かせの重要性に対する信念を固めさせ、読み聞かせにいそしもうとする原動力を与えるこ

とになろう。

(2) 本の世界の楽しさを教えるのが当面の目的であると知れば、偏狭な功利的・知識主義的な目的観にこだわらず、悠々と読み聞かせを楽しみむゆとりも生まれてこよう。本の世界の楽しさに気づくことからすべての能力・知識欲が生まれてくるのである。

(3) 他方、本と子どもとを結びつけるのが、読み聞かせの究極の目的だと気づけば、子どもたちの生涯を見通して、能動的・主体的にどのような読書生活を送るように誘うか、考えざるを得なくなる。読み聞かせは、出発点として大切であるが、読書生活指導の一環なのである。拘泥すると、学習者を足踏みさせてしまう恐れも出てくるのである。したがって、子どもたちの精神的成長と読書意欲に応じて、読み聞かせを役立てていくことが不可欠になってくる。

(4) 読み聞かせによって、読み手である教師自身の物語への解釈、味わい方、感動が、声と一緒に子ども心に受け入れられ、それによって一層本の世界を楽しむものなのだと思えば、そして、それはむしろ文字が読めるようになって、成長すればするほど汲みとれるものだとすれば、教師の絵本への親しみの度合い、読み聞かせにどれだけ精進しているかが鍵だと気づかれてくる。一五歳から七八歳まで小学校の教壇に立った芦田恵之助は、「一

回通読の親しさと三回通読の親しさとは到底比較にならぬ。」(『読み方教授法』大正三年、引用は、『芦田恵之助国語教育全集』第七巻、明治図書、昭和六二(一九八七年、四〇ページより)と実体験に基づいて明言している。相手は子どもであっても、こちらの声の安定度を見抜かれるのだと覚悟して、読み聞かせにいそしむことが要請されてこよう。

(5) 読み聞かせを通して、教師があえて時間を使い、手間をかけて読み、子どもと同じ世界とともに生きる経験をするとは、お互いにとつてかけがえのないことである。それだけに読み手である教師と聞き手である子どもとが、ともに喜び、ともに悲しむことによって心が通い合うことは何よりうれしいことである。そのような時が必ず来ると信じて本を選び、読み聞かせを継続していく信念として生きてくるものになろう。

この五点を己に課していくことは、私たち教師の読み聞かせに対する信念を固めつつも、その効果については冷厳な目で見つめ直し、さらに読み聞かせの能力を高めていくことになろう。

III 読み聞かせにふさわしい絵本の選び方

文献(1)「絵本の読み聞かせ」には、さらに(4)「グループへの読み聞かせに向く本を選ぶポイント」として、以下の

五点が記される。

「① ある程度の大きさがあるか。

② 絵がよく見えるか：単純な、力強い線でくつきり描かれ遠目のきくものが多い。

③ 絵と文の割合が、子どもの心のペースに合うか：絵に対し、文の量が多すぎるのはよくない。

④ 場面割りは適切か。

⑤ 見聞きを有効に使っているか。：見聞きに一場面が「好都合」

文献②「絵本よみきかせのポイント」には、それと照応させて、このような項目を挙げるゆえんが、以下のように示されている。

読み聞かせに合った本

その1 絵本の大きさ

ある程度の大きさがなければなりません。「ピーターラビットの本」(「ピーターラビットのおはなし」ピアトリクス・ポター文・絵／石井桃子訳、福音館書店、昭和四六(一九七二)年、五五ページ)はよい絵本ですが、グループに読んで聞かせるには小さすぎます。

その2 絵がよく見えること

大きさとともに、絵柄も問題になります。「ちいさなうさこちゃん」(ディック・ブルーナ文・絵／石井

桃子訳、福音館書店、昭和三九(一九六四)年刊、二六ページ)のように単純でよいなもののない絵は、本そのものは小さくてもグループの前で使えます。

「こごちゃんはどこ」(松岡享子文／加古里子絵、福音館書店、昭和四五(一九七〇)年、二七ページ)のようにこまかくかきこんであって、それがおもしろさの大きな部分を占めている絵本は向きません。単純な、力強い線でくつきり描かれ、遠目がきくのがよいのです。あらかじめ、離れたところから絵を見てためしておく必要があります。

その3 絵と本の割合

ひとつの絵に対して文の量が多すぎないこと、たとえば「マーシャとくま」(ロシア民話、M・プラトフ再話／E・ラチョフ 絵／内田莉沙子訳、福音館書店、昭和三八(一九六三)年、一二ページ)はお話もとてもおもしろいし、絵もよいのですが、絵が五場面しかないで、一場面あたりの文の量がかなり多くなっています。お話ではまだ起こっていないのにすでに絵で示されたり、お話ではその場面は終わったのに、絵はずっと同じだったり…。

幼い子はページがくられ新しい場面があらわれることを期待して、文(章)が長すぎると落ちつかなくなります。一場面に対する文の量は、なるべく少なく、

話についていく子どもの心の動きと、場面の变化のペースが合うことがのぞましい(の)です。

その4 場面割り

お話の進み具合と、絵の場面数の割合もたいせつです。物語の進路にそった場面割りがされていることがのぞましいのです。物語の進展のうえであり重要性をもたないことがらが、何場面にもわたって描かれていたり、反対に、物語にとって大事なことがらが、いくつも一場面に押し込められていたのでは、お話を聞きながら絵をながめているとき、ちぐはぐな感じを受けます。

その5 見聞きに一場面

見聞きに一場面というのが、絵を見せて読むには好都合です。「おおきくなりすぎたくま」(リンド・ワード文・絵/渡辺茂男訳、福音館書店、昭和四四(一九六九)年、八七ページ)のように、終始片面が絵、片面が文という形のものもあれば、「てぶくろ」(ウクライナ民話、エフゲーニ・M・ラチヨフ絵/内田莉莎子訳、福音館書店、昭和四〇(一九六五)年、一六ページ)のように、見聞きごとに両面を使って一場面というのがあります。見聞き面に、三場面も四場面もの絵が描かれている例として「ペチューニア」があります。が、こういうところは、読みながらその場面をかるく

指さしましょう。(一ページ)

数人〜二、三〇人の幼児に読み聞かせる場面を念頭に置いて、絵本を吟味する条件が、文献(1)では問い、文献(2)では答えの形で五点挙げられている。後者の具体的な「読み聞かせに合った本」の説述は、松岡享子氏の『えほんのせかい こどもの世界』に付録として載せられた「グループの子どもたちに絵本を読み聞かせるために」の「1 読み聞かせに適した絵本の条件」一〇〜一一ページをほとんどそのまま祖述する形で記されている。松岡享子氏の説かれたところに全面的に共感されて、文献(1)に五条件として集約されたものであろう。文献(2)の最初の二点「その1 絵本の大きさ」と「その2 絵がよく見えること」は読み聞かせに合う絵本の絵に絞って、どのような絵がふさわしいかに言及している。幼児期は、松岡享子氏によれば「絵でものを考える時代」(同上書、三四ページ)であるという。したがって、読み聞かせに向く文章を探す際にも、そこにいざなう絵が、まず問題になってくるわけである。幼児の心になつて、絵本の文章を読む前、絵だけを見ていた時に、前提として「その1 絵本の大きさ」が必要になってくる。何十人もが絵を見るのであるから、ある程度の大きさがないと、「絵を見ながらお話を聞く」ということの基礎的要件が失われてしまうのである。ただし、どのくら

いの大きさとということ、幼児が絵を見てわかるかどうかで決まることで、縦横何十センチないと駄目というように、客観的な条件として決められるものではない。そのことが、「その2」に、「絵本がよく見えること」と示されている。「絵柄」(絵の性格)ということばを用いて、下記の二例を掲げ、どのような絵本がよく見えるのかの目安を探らせようとしている。

「ちいさなうさぎちゃん」(ディック・ブルーナ)

…絵本そのものは小さくても、単純でよいいなものがないため、幼児には見てわかりやすく、グループで読み聞かせる際にも使える。

「とこちゃんはどこ」(松岡享子)

…たくさんの人物がこまかく書き込んであり、主人公がどこにいるかを探し当てることがおもしろさになっていくような絵本は、個人に読んであげるばあいであればともかく、集団には向かない。

そして、「単純な、力強い線できつくり描かれ、遠目がきくのがよい」と結論づけている。絵本の絵が、ほんとうに「よく見える」かどうかは、教師を囲んで後ろの方から聞く幼児の目から見るほかに、読み聞かせをする前に「離れたところから絵を見てためしておく」ことが不可欠とされている。「その1 絵本の大きさ(がある程度あるかどうか確かめること)」も「その2 絵本が(離れたと

ころからでも)よく見える(かどうか事前に見ておく)こと」も、それぞれは少しの時間をかければできることである。しかし、それらは、実際に幼児が絵本を見る場面を絶えず念頭に置いて、相補的な条件と見なすしかないことなのである。また、絵本の読み聞かせは日々別の本を取り上げて行われるため、どの本を選ぶか考える際に継続的に發揮されなければならないのである。教師として絵だけを読んで、この二条件から見てよい絵かどうかを確かめることが、よい絵本を探る第一歩になると言えよう。

「その3 絵と文と割合」より以降は、実際に絵本を読み聞かせる時を念頭において、絵と文章とのかわりから、ふさわしい条件を引き出し出している。「その3 絵と文の割合」は、一枚の絵に伴う文の量を問題にしている。ここで初めて読み聞かせの対象となる文章が、選定の組上りのぼつてくる。この観点から、絵本「マーシャとくま」(M・プラトフ)を見た時、以下のような問題が出てくるとしている。

「マーシャとくま」……お話がおもしろく、絵は大きく、絵柄もよい。したがって、「その1 絵本の大きさ」、「その2 絵がよく見えること」という上記二条件は十分に満たしている。しかし、絵が五場面しかなく、一場面あたりの文の量がかなり多くなっている。

(その結果、引き起こされること)……文と絵との齟齬

(ア) お話ではまだ起こっていないのに、すでに絵で示されるところが出てくる。

(イ) お話ではその場面は終わったのに、絵はずっと同じところのままになる。

(幼児の心理)

文が長すぎると、ページが繰られ、新しい場面が現れることを期待して、落ちつかなくなる。(次の場面が出てくるのを待ち切れなくなり、聞くことに集中できなくなる。)

その上で、「一場面に対する文の量は、なるべく少なく、話についていく子どもの心の動きに場面の变化のペースが合うことがのぞましい」と結論づけている。いくら絵が大きく、絵柄がよく見えても、お話がおもしろくても、絵に引きつけられて聞く時期の幼児には、読み聞かせる文の方が多いものは飽きが来てしまうのである。そうすると、①一場面の絵についた文の量が多くなるべく少ないこと、②絵と文章とが、お話を聞く子どもの心に動きに合うもの(両者が調和しており、子どもの心の動きを見抜いて、離さないものであること)という、二点が求められてくる。①文の量の少ないことが基本的条件になろうが、②絵と文章との割合が、幼児の心の動きに合うものとなると、聞き手がどの程度まで書いたものであれば、絵と文章との割合がとれたものと感じるのか、幾分幅が出てくる。それゆえ、対象

年齢も考慮して、絵と文とが一致して子どもの心の動きに合うものになっているかどうか判断することが必要になってくる。

「その4 場面割り」は、一枚の絵にとどまらず、絵の展開を取り上げて、お話の進み具合(事件展開)との一致を要請したものである。「その3 絵と文の割合」が一枚ずつの絵と文との照応を条件としたのに対して、ここでは「絵の場面数」とすじの展開との照応が求められている。絵本例は拳がっていないが、次のようなことは避けたいとしている。

○物語の進展の上ではあまり重要性をもたないことだが、何場面にもわたって描かれる。

○物語にとって大事なことがらが、それだけ場面をとって扱われることなく、一場面に押し込められる。

したがって、物語の進展にそって、場面割り(場面構成)がなされていることが必要なのである。

さらに「その5 見聞きに一場面」は、「その2 絵がよく見えること」・「その3 絵と文の割合」・「その4 場面割り」において暗黙の了解事項になっていたことを、「見聞きに一場面というのが、絵を見せて読むには好都合」と顕在化させている。見聞きに一枚の絵(片面であっても、両面であっても)であると、絵柄が遠くからでも見えやすく、一枚の絵に対して文の量が合わせやすく、お話の進み

具合と絵の場面割りが一致しやすくなるのである。余計な説明を入れずに、幼児を絵に出会わせ、その上で耳から文章をなだらかに注いでいくことが可能になってくる。ただし、見開きに、いくつもの場面の絵が描かれているばあいには、「読みながら、その場面をかるく指さす」などの補いをすれば、読み聞かせる絵本として扱えるとしている。したがって、「その5 見開きに一場面」というのは、教師が絵本を読む際の便宜を考えて基本的には望ましいこととして掲げられた項目と言えよう。

このように見えてくると、幼児が絵本に出会う際を念頭に置いて、まず絵と出会い、その上でめくられる絵を見ながら、読み聞かせの声を通して文章（すなわち絵本）と出会いという二段階を設定し、その順に読み聞かせに合った本を選ぶ条件が記されていると言えよう。ただし、これらは、形式的条件である。

松岡享子氏の『えほんのせかい こどものせかい』には、内容的条件と言いつけるものが、以下の二章・節に掲げられている。該当する箇所の小見出しも、合わせて掲げることにする。

(第一章) 子どもを本の世界へ招き入れるために

○絵本の評価は、まず虚心に絵を読むことからはじめましょう。

○絵本のよしあしを見きわめる目を養うために、満二

十五歳以上”の絵本を読みましよう。

○絵本のもっているさまざまな要素のうち、わたしは、わけても“あたたかみ”を大事に考えます。

(第二章) 新しい経験としてのおはなし

(1) 子どもたちは、おはなしの中に、まずひとつの経験Ⅱ精神の冒険を求めます。そのためには、ぜひとも主人公と一体化する必要があります。

(2) おはなしの文章は、子どもの心を主人公という乗りものに乗せて、遠くへ運ぶレールの役目を果たします。

(3) 子どものおはなしは、構成についても、表現についても、昔話から学ぶところが大です。

(4) 子どものためのおはなしは、子どもに理解でき、共感できるテーマと題材を選ぶべきです。

このうち、第一章「子どもを本の世界へ招き入れるために」に述べられている絵本選定の条件を、表にすると、次のようになる。

1(1) 絵本の絵によって、お話のすがたどれ、作中人物の気持ちが変わり、作品全体のムードが感じられるようなものでなければいけない。(絵は、子どもたちにとって、「実生活での経験を確かめ、整理し、それを通して、頭の中で再現」する役割をしているため)

(2) 将来、本を読む際にぜひ身につけていなければならぬ「ものごとを絵にする力」を養うために、絵本の絵

は、細部に至るまで正確でなければいけない。(絵は、「子どもたちの知識や経験の乏しさを補い、想像力に確かな後ろだてを与える」役割を果たしているため)

(3) 絵本は、子どもたちに美的満足を与え、より質のよい美しさの世界へ引き上げてくるものでなければならぬ。(「すぐれた絵本は、美しさに対して、子どもの目を開き、ものを見る目を養う役割を果たす」ため)

2 すでに何年もの間、子どもたちに愛され、いわば古典になっている絵本(評価の定まっているもの)を思い浮かべて、それと共通の要素があるかどうかを吟味してみる。

3 できるだけ虚心に、子どもが絵本を読むときの心に近づいて、絵だけで物語を追っていき、その上で文章と合わせて読み直すようにすること。

4 (教師側の条件) 上記1〜3を堅固なものにするのは、絵本のよしあしを見きわめる目を養う必要があり、そのために長年子どもたちから変わらぬ愛着をもって読まれ続けてきた絵本に数多く接することが大切になってくる。

これらは、絵に着目したばあいの選定条件である。それに対して、第二章「新しい経験としてのおはなし」は、お話(文学)として見たばあいの選定条件である。これらは、以下のようにまとめられよう。

5 (主人公) 子どもが主人公と一体化して、おはなしを新しい精神の冒険として受けとめられること。具体的には、(1)子どもたちが容易に一体化できる主人公を設定しており、(2)話の冒頭から、真正面からいきなり登場し、すぐ行動を起こして、子どもの心を引き張っていくものがのぞましい。

6 (すじ) 子どもの空想へのエネルギーが無理なく、しかもひとつにまとまって流れだし、遠くに運ばれていくようなすじ(ストーリー)の発展が求められてくる。

7 (構成・表現) 構成としては反復や対比という繰り返しが基本的になってきたものであること、表現としては、すべてを目に見える行動によってあらわし、その結果として聞き手に感情を生じさせるものであること。いずれも、昔話に根ざしたものである。

8 (テーマ・題材) 子どものために書くお話であるから、子どもに理解でき、共感できるテーマであり、題材が選ばれるべきである。

形式的条件も、内容的条件も、幼児(子どもたち)が「絵を見ながらお話を聞く」ことを念頭に置いて、(ア)絵に着目したばあい、(イ)お話として見たばあい(実際にお話を聞けばばあい)の二層に分けられていることが、判明してくる。

それを表にしてみると、次のようになる。

文章に着目したとき	絵に着目したとき	
<p>(5) 見開きに一枚の絵であれば、余分な立ち止まりや説明がなくて、お話に入らせていかせやすい。</p> <p>(4) 『教師が絵本を読む際の便宜上、望ましいこと』 「教師が絵本を読む際の便宜上、望ましいこと」 「教師が絵本を読む際の便宜上、望ましいこと」 「教師が絵本を読む際の便宜上、望ましいこと」</p> <p>(3) 一枚の絵に対する文章の量が少なく、絵と文章との割合に均衡がとれ、子どもの心の動きに添うものであること。</p> <p>× 『マーシャとくま』M・プラトフ</p>	<p>(2) 絵柄(絵の性格)は、単純な力強い線できつかり描かれ、遠目が大きくものであること。</p> <p>○ 『ちいさなうさぎちゃん』ディック・ブルーナ ○ 『ちいさなうさぎちゃん』ディック・ブルーナ × 『とこちゃんはどこ』松岡享子文、加古里子絵</p>	読み聞かせに向く絵本を選ぶ際の形式的条件
<p>(イ) 子どもが絵本を読む時の心に近づくために、虚心になつてまずは絵だけで物語を追っていき、作品にひたれるかどうかの見通しをつけること。</p> <p>(ロ) すでに何年もの間、子どもたちに愛されてきた、古典と言える絵本と照らし合わせて、それらと共通の要素があるかどうか、吟味してみる。</p> <p>(ハ) ①具体的には、絵によって、お話のすじがたどれ、作中人物の気持ちが変わり、作品全体のムードが感じられるものであること。</p> <p>② 以後、ものごとをイメージとしてとらえる力を養うための素地となるような、確かな絵であること。</p> <p>③ 子どもたちに美的満足感をもたらし、より質のよい美しさに引き上げてくれるような絵であること。</p> <p>(ニ) 子どもが容易に主人公と一体化して聞きひたり、おはなしを新しい精神の冒険と感じられるものであること。</p> <p>(ホ) 子どもたちの空想へのエネルギーが、無理なく、ひとつにまとまって流れだし、遠くまで運ばれていくようなすじ(ストーリー)の発展があること。</p> <p>(カ) 昔話のように、構成としては反復や対比という繰り返しが基本となっており、表現では、すべてを目に見える行動によって表したものであること。</p> <p>(キ) 子どもたちのために書くお話であればこそ、子どもが理解し、共感できるテーマ・題材であること。</p> <p>※絵としても、文章としても、絵本のよしあしを見きわめる目を養う必要があり、そのために長年子どもたちから愛され続けた作品で鍛えていくこと。</p>		読み聞かせに向く絵本を選ぶ際の内容的条件

これらのうち、川島久美子氏が上欄の形式的条件のみ掲げられたのは、そちらの方が基底であり、絵本を選ぶに際して、このような資料を読み返さなくても發揮できるぐらゐに体得できていなければ、実際に役に立つものにはならないという思いがあるためであらう。それに対して内容的条件については、松岡享子氏が示されたものを基に、教師の絵本を見る目が肥えるに従つて、さらに改良していく余地を残されたものと言えようか。それだけ、内容的条件に關しては、教師の努力によつて、さらにつけ加えていくところが多いものなのであらう。

以上のように整理した上で、読み聞かせにふさわしい絵本の選び方に関する教師の力量形成をはかるとすれば、次のような諸点が努力目標になつてこよう。

(1) 読み聞かせに向く絵本を選ぶ際には、まずその絵本の大きさや絵柄の明確さに着目して、以下の吟味の前提条件を満たしているかどうかを考える習慣が身につくことが大切である。

(2) 内容面においても、読み聞かせの前提となる絵だけを見ていて、それだけでも作品世界にひたれるものになつているかどうか、自らの鑑識眼が妥当性を備えているかどうかを振り返り、物事を絵にしていくなりや質の高い美しさに引き上げていく力になつていくかどうか調べていくことが不可欠になつてくる。

(3) 絵本の絵を確認した上は、絵と文、そして、絵の場面割りと文章展開とが照応一致しているかどうかを目を向け、暗黙のうちに前提となつていた見開き一場面になつているものか否かにも、目配りしていくように努める。

(4) 内容面としても、文章もあいまって、子どもが主人公と一体となつて新しい精神の冒険と思えるようなすじの展開を体験しうるものかどうか、そして、子どもとして共感しうるテーマ・題材、安心してひたれる構成、表現になつているかどうかを探り、さらに絵本選択の新たな観点を見いだすようにする。

(5) 素地としての絵本を見る目を養う必要を自覚して、長年読まれ続けた絵本で自らの鑑識眼を鍛えようとする修練を積み重ねていくこと。

(まえだ しんしょう・本学教授)